教育長だより　No. 23

２０２３年１２月１５日

差別は「今、ここ」にある

～　「今どき」の人権学習のすすめ方とは？　～

１２月の「人権週間」に合わせるように、いくつもの学校では人権学習が行われました。2016年の「人権３法」の制定以来、教育・啓発の重要性が大きく問われています。そこで、一昨年の11月に人権センターでお聞きした江嶋修作さんのお話をもう一度みなさんに紹介します。今どきの部落問題学習のあり方について、力強く話されました。「和田部落解放文化つどい」の講演です。２年前はコロナ禍で縮小を余儀なくされ、講演会（午前中）と展示（１週間）のみでした。江嶋修作さん（広島・解放社会学研究所）の講演テーマは、「『恥ずかしい』のはどっちだ～野洲中学校連続差別事件から学んだこと～」でした。

江島さんは、本市の野洲中連続差別事件が起きた当初（1988年＝昭和６３年）から関わられています。事件を聞いたその日はたまたま滋賀県に来ておられ、翌日すぐに野洲へ来られたそうです。センターに着くと、一つの部屋に中学生が２０人あまり、みんな下向いて暗い表情で座っていたとのこと。この出会いから、この差別事件の克服は大人ではなく中学生自身によるべきだと考えられた江嶋さんは、その支援として、同様の事件を１年前に乗り越えてきた尾道（広島県）の中学生を紹介。そして、尾道での交流へと発展していきました。尾道に来た野洲の子は当初下を向いていましたが、１泊２日の交流を終えて帰るころには学校での取り組みの方向性が見えてピースサインを出すほど元気になっていたとのことです。（こんな風に、江嶋さんのお話はまるで昨日のことのように続きました。）

一番強調されていたのは、「差別やいじめは人間関係の中で起きる。個人の問題ではなく、集団力学的な中で起きています。個人が心理的に追い詰められて起きるのではありません。個人の問題なら道徳で何とかなります。しかし、差別は集団力学的なできごとですから、この仕組みをしっかり教えるべきなんです。」と。また、「子どもたちに効果的な差別との闘い方を教えるべきです。」と続きました。そして、「『差別はいけない。悪いこと。』という昔からのあたりまえの言い方では今の子どもたちには入りません。それより、『差別（すること）は、人として恥ずかしい。』と教える方がスーッと入るんです。」とも言われました。この感性が大切だそうです。

さらにもう一つ。それは『差別は、今、ここにある。』ということです。学校の部落問題学習では「渋染め一揆」（江戸時代）などの歴史学習や、現代の就職差別・結婚差別をよく学習します。もちろんそれらを学ぶことも大切ですが、今、目の前にいる子どもたちが出会っている、あるいは出会うであろう「生（なま）の問題」を学ぶことが差別克服の一番の道であると話されていました。具体的には、祖父母や近所の大人からの偏見です。「〇〇（地区名）の子とは遊ぶな。」とか、「こわいから気をつけろ。」などの言葉です。『人権の世紀』と言われる今の時代、こうした偏見や差別はなかなか表立って出てきません。でも、意外と身近な人から伝えられている場合があります。それに出会ったとき、子どもたちがどう乗り越えるのか。それが差別のない世の中を一層広げていくポイントであると述べられていました。

（裏面へ）

こうした江嶋さんのお話を聞いて私は次のように考えました。
まず、よくある中学校の部落問題の実践例を紹介します。歴史学習や結婚差別などの学習、もしくは視聴覚教材を見て、すぐに（あるいは宿題で）感想を書かせます。すると、中学生ですから（感想文は）書きなれています。「私は、そんな差別を許さない生き方をします。」とか、「差別は絶対にいけない。」という、いわゆる『ええ子ちゃん』の作文ばかりとなります。

しかし、これでは何の力にもなりません。学校の学習後がポイントです。学んだことを家に持って帰り、父母や祖父母、あるいは近所の人に話すことです。そして、そうした身近な大人の反応を含めて「感想文」を書いてもらうのです。私は、前任地の隣町で中学校の担当の先生たちとだいぶ論議しました。そして、「うわべ」だけの学習では子どもたちが目の前の差別をなくす何の力にもならないので、先のような「地域の実態」を掘り起こす学習（身近な人たちの認識を探る取組み）を進めました。すると、次のような作文が出てきたのです。
「６年の時、おばあちゃんが『中学校行ったら気つけや。〇〇町の子がいてるから。あんまりかかわらんようにするんやで。』と言っていた。ぼくはその時何のことかわからんかったけど、今日の勉強して、あれが差別やいうことがわかった。」また、「〇〇町は怖い人がいっぱいいてるから行ったらあかんで。」というような作文もありました。さらに、「私のおばあちゃんは〇〇町のことをよく言いません。先生、おばあちゃんにも今日学校で習ったような勉強を教えてください。」などという頼もしい内容も出てきました。

こうして、子どもたちが親や祖父母など、身近な人の偏見とぶつかっている校区の実態がいくつか見えてきたのです。当時、各中学校ともだいたい２０人に一人くらいの子がこうした内容の感想文を書いてくれました。そして、その代表的な作文を使ってもう１時間学習していきました。「みんなと同じ学年に身近な人からこんなことを言われた子がいます。みなさんなら、どう答えますか？」などと、みんなで考えていくような学習でした。このような地域に根差した部落問題学習が子どもたちに差別をなくす力をつけると思います。
子どもだけではありません。野洲市の新赴任人権研修会でも「自分と部落問題との出会い」について振り返ってもらったところ、何人かの方が「身近な人からの偏見」について明らかにしてくれています。毎年です。

なお、こうした学習の進め方は部落問題だけでなく、障がい者や在日外国人、LGBTQなど、いろんな人権問題に応用できます。自分に一番近い人がどう考えるのか？ だれしも関心が深いことであり、また、そうした身近な先輩の考えをどう捉え、新しい時代に向けてどのように乗り越えていくのかを探る絶好の機会でもあると思います。その意味では、学級担任の先生は子どもたちの「生き方のモデル」です。さまざまな人権課題に対して、「先生はこんなふうにとらえて、こう思っているよ。」と語ること。身近な先生が、「自分とのかかわりで考えることの大切さ」を伝えることにこそ、大きな価値があると思います。（野洲高校では「私が主語の人権学習」という題で実施されています。）人生の先輩として、先生が「自分を語ること」。そんな授業を受けた子どもたちは、きっと心の底から差別をなくしていく生き方をしてくれることでしょう。

江嶋さんの話に戻ります。江嶋さんは身近な人による差別への「効果的な学習」として、次のような事例を出されました。
「私は、今までいっぱい愛情を注いでくれたおじいちゃんが大好き。尊敬もしてる。でも、今日のような差別をするおじいちゃんは好きにはなれない。」身近な人の心に響く言葉は、この一言です。
江嶋さんのお話は、１つ目が「差別することは、人として恥ずかしい。」（生き方の問題として教えること）です。そして、もう一つが「差別は、今、ここにある。」（目の前のことを乗り越える力を具体的につけること）です。私は、そう捉えました。